

ロバート・メリーとメアリー・ロビンソン  
——フランス革命と感受性の詩——

田久保 浩

Robert Merry and Mary Robinson:  
The French Revolution and the Poetry of Sensibility

TAKUBO Hiroshi

言語文化研究 徳島大学総合科学部

ISSN 2433-345X

第 28 巻 別刷 2020 年 12 月

Offprint from *Journal of Language and Literature*

*The Faculty of Integrated Arts and Sciences*

*Tokushima University*

Volume XXVIII, December 2020



ロバート・メリーとメアリー・ロビンソン  
——フランス革命と感受性の詩——

田久保 浩

Robert Merry and Mary Robinson:  
The French Revolution and the Poetry of Sensibility

TAKUBO Hiroshi

**Abstract**

This study is based on a hypothesis that the concept of sensibility that bridges different nations, sexes, classes to one common humanity is one of the foundations of the principles that brought about the French Revolution. It is a natural consequence that the highly developed form of the poetry of sensibility represented by the Della Cruscan, namely Robert Merry and Mary Robinson, culminated in two major poems celebrating the French Revolution. The revolutionary ideas based on common humanity is also a common feature shared by the major poets of English Romanticism. The thematic analyses of Merry's *The Laurel of Liberty* and Robinson's *Ainsi va le Monde* reveal that they have in common the features of English Romanticism. In case of Merry's, it is the meditation on the state of man and society and the hope for overcoming violence, war, and oppression. In case of Robinson's, it is the idea of freedom as essential to artistic creativity represented in the mythological figure of Prometheus, which is famous for Shelley's *Prometheus*

*Unbound*. Thus by contextualizing the poetic exchange of the two poets from the Della Cruscan movement in the poetry of sensibility and at the same time contextualizing it in the development of English Romanticism, we have a better understanding of the origin of the revolutionary visions in the later English Romantic poets.

過去 30 年ほどのイギリスの十八世紀、十九世紀文学研究は、近年の歴史的文献の電子化などによる研究手段の変化、女性作家の存在の重要性についての再評価への流れといった背景により、文学史を書き換えるような目覚ましい進展を見せている。それにより、十八世紀から十九世紀初期にかけて、女性作家が小説や詩において男性作家を凌駕していた状況が明らかになりつつあると同時に、「感受性」の文学思潮に特徴づけられる女性詩人たちについて、レティシア・バーボールド、ヘレン・ウィリアムズ、メアリー・ロビンソンらと、ワーズワースやコールリッジら、フランス革命以降に登場するロマン派と称される主要な詩人たちとの関係も含めての研究も飛躍的に増えている。「感受性」の女性詩人たちとロマン派詩人たちとの関係について、スチュワート・カランは、「感受性の詩は、根本的な意味で心理的探査の文学であり、ロマン主義はその基盤の上に築かれたものなのである」と述べている。<sup>1</sup> 人間心理についての洞察のみならず、フランス革命という形で具現化した政治的理想、人間社会の在り方についての問題意識においても、1780 年代から 1790 年代前半にかけての感受性の文学はロマン主義の詩の先駆けとして重要である。フランス革命の人類同胞という理想のもととなったのは、一つには知識の集積と科学的思考により、世界のあらゆる人種、民族、宗教、社会において、根本的な優越性は存在しないという啓蒙主義の理性的価値観であるが、同時に、そうした相対的な見方を可能にした背景には、新聞や雑誌上、あるいは中流階級のサロンにおいて、男女の差や階級を超えて、自由闊達な議論が可能となっていた社会的実態がある。本稿においては、フランス革命前後の数年間、新聞メディアを通じて絶大な人気を博したデッサクルスカこと、ロバート・メリーと、ローラ・マリアこと、メアリー・ロビンソンとの間で交わされた詩の交換に焦点を当てる。二人の詩の競演が最高潮に達するのが、フランス革命をテーマに取り交わされたメリーの『自由の桂冠』(*The Laurels of Liberty*)とロビンソンの『世界はこう進む』(*Ainsi Va Le Monde*)である。ロビンソンの詩は近年、研究者から多くの注目

<sup>1</sup> Stuart Curran, Curran, Stuart. "Romantic Poetry: The I Altered." Anne Kostelanetz Mellor, ed. *Romanticism and Feminism*. Indiana University Press, 1988, 197.

を集めているが、メリーの詩についてのまとまった論考は依然として多くはない。しかしながら二つの詩をめぐる両者の呼応関係に焦点を当てることで、そこに後のロマン派詩へとつらなる重要な要素が見えてくるのである。本稿においては、メリー、ロビンソンら「デッサクルスカ派」とロマン派の接点について触れた後、二人の詩人の出会いと詩の交換について振り返ったのち、フランス革命について二人が交換した主要な 2 編の詩に焦点をあてて論じる。その中に後代のロマン派につらなる特徴が見えてくるのである。<sup>2</sup>

### 1. デッサクルスカ派とロマン派

ロバート・メリーについて、文学史上の重要性を積極的に評価する研究はまだ多くないが、ロマン派の主要な詩人たちにその影響は随所にみられる。コールリッジやメアリー・ロビンソンと親交のあった後の桂冠詩人ロバート・サウジーはメリーの詩人としての才能について *The Pains of Memory: a Poem* について触れながら、「方向の誤りはあっても、私は常に高く評価していた」と語っていた。<sup>3</sup> ウィリアム・ワーズワースについても興味深い研究がある。アルンド・ボームは、ワーズワースの 1793 年発表の *Descriptive Sketches* の 151 行にロバート・メリーの、*Paulina; or, the Russian Daughter: A Poem in Two Books* (1787) からの引喩がみられることを指摘している。さらにメリーが自分の本の脚注で紹介している本も、ワーズワースは自身の脚注で触れている。この詩には、他にもメリーの詩からのエコーがみられることから、ワーズワースがメリーの詩を読んでいたのは間違いないと結論付けている。<sup>4</sup> これは、ワーズワースが当時流行の詩を「多くの現代作家の派手やかで意味のない言い回し」(“the gaudiness and inane phraseology of many modern writers”) と 1800 年の『抒情民謡集』のまえがきで批判したのは、デッサクルスカ派の詩を念頭に置いたものと一般的に考えられている事と照らし合わせると興味深い。ワーズワースの詩は彼が 1790 年

---

<sup>2</sup> Ashley Cross は、*Mary Robinson and the Genesis of Romanticism* (Routledge 2017)において、メアリー・ロビンソンの、特にスタイルの異なった詩人たちに共感をよせ、つながる要素について、ロマン主義の先駆けの現象として注目する議論を展開している。

<sup>3</sup> Letter from Robert Southey to G. C. Bedford, June 26, 1796 in *The Life and Correspondence of Robert Southey*, edited by Charles Cuthbert Southey (London: Longman, 1849-50), 1: 282. Web. *Google Books*.

<sup>4</sup> Arnd Bohm, “Borrowing from Robert Merry in Wordsworth’s ‘Descriptive Sketches’ (1793),” *The Wordsworth Circle* 38 (2007), pp. 146-147.

にフランスを徒歩で旅行した際の経験をもとにしているが、そこで立ち寄ったグランシヤルテレーズは、その前年ロバート・メリーが滞在し、詩に残している地でもある。フランス革命前後の時期、デッサクルスカとして一世を風靡していたロバート・メリーをワーズワースが周到に読んでいたことは十分に考えられる。

ロバート・ブラウニングの“Childe Roland to the Dark Tower Came”は、シェイクスピアの『リア王』中、トムに扮するエドガーのセリフからその題名を採ったものだが、若き騎士が不思議な城に導かれるというモチーフにおいて、*The Florence Miscellany* 中のメリーの作品“Sir Roland, A Fragment”を参考にしている可能性は高い。メリーの詩においては、不気味な城の奥に導かれたロランは、最後、暗い部屋でろうそくの光に照らされ、自身の髪の毛により死体として吊るされた女が目をもくのに遭遇するところここでこの断片は終わる。バイロンがコールリッジの『クリスタベル』を暗唱した際、ジェラルダインがクリスタベルに自分の体を露わにすることで、朗読を聞いていたシェリーが卒倒したという話は有名である。シェリーはジェラルダインの胸に大きなざらりとした目があるのを想像したらしい。メリーの詩の末尾は、同じゴシックの雰囲気漂わせる『クリスタベル』に影響を与えている可能性もある。

コールリッジとメアリー・ロビンソンとは、ともに 1797 ごろからダニエル・スチュワートが所有する『モーニング・ポスト』紙の寄稿者として互いのことを知るようになるが、持病のリウマチの悪化でロビンソンが 1800 年末に亡くなる前の 1 年ほどの間、両者は面識を得て親しく詩を交換する仲となっていた。コールリッジは友人のサウジーへの手紙でロビンソンのことを「疑いなき天才のそなわった女」と称賛していた。<sup>5</sup> メアリー・ロビンソンは、コールリッジが 1816 年まで発表を控えていた「クープラ・カーン」の原稿を最初に見せた一人であった。ロビンソンの「詩人コールリッジへ」は、その詩の感動を恐らくは自分自身のために残そうと一つ一つのイメージを詩的なパラーフレーズとして表現したもので、彼女がコールリッジのヴィジョンの深い意味を理解していたことを伝えている。フランス革命の経験を共有するメリー、ロビンソン、サウジー、コールリッジ、ワーズワースらは、後にワーズワースが『序曲』第 11 巻で「夜明けの時代

---

<sup>5</sup> コールリッジとロビンソンとの文学的関係については、以下を参照。Tim Fulford, “Mary Robinson and the Abyssinian Maid: Coleridge’s Muses and Feminist Criticism” *Romanticism and Masculinity : Gender, Politics, and Poetics in the Writings of Burke, Coleridge, Cobbett, Wordsworth, De Quincey, and Hazlitt* (Macmillan, 1999). Daniel Robinson, *The Poetry of Mary Robinson: Form and Fame* (Palgrave Macmillan, 2011): 190- 205. Ashley Cross, *Mary Robinson and the Genesis of Romanticism* (Routledge, 2019).

に生きることの喜び、若者であったことはまさに至福！」(Bliss was it in that dawn to be alive./ But to be young was very Heaven!) と振り返ったフランス革命の感動を共有する若者たちであった。1790年代に反革命の風潮が強まる中で、後にロマン派と呼ばれる年少のワーズワース、コールリッジ、サウジーの3人は革命の思想に反対する側に立つことになるわけだが、これら詩人たちは、同じフランス革命の土壤に育まれた若者たちだったのである。

## 2. ロバート・メリーとメアリー・ロビンソン

メアリー・ロビンソンは舞台女優であったが、シェイクスピアの『冬物語』にパディータの役で出演した際、のちのジョージ四世となる皇太子に見染められ愛人となる。しかし皇太子に見捨てられた後、軍人タールトンの内縁の妻になり、1780年代の多くをフランス、ドイツで過ごす。1788年、イギリスに帰郷すると同時に、少女時代に手を染めた詩作を本格的に再開する。その際に注目したのが当時、アナ・マチルダことハナ・カウリーと新聞紙上の恋愛詩の交換で、人気の的であったデッサクルスカことロバート・メリーである。ロビンソンは、デッサクルスカ派に倣って、ペトラルカの恋人の名を取りローラ・マリアを名乗り、デッサクルスカ詩で有名となった『ワールド』紙に詩を寄稿する。最初に注目されたのが「わかってくれる君に宛てて」(To Him Who Will Understand It)である。恋に飽きて故郷を捨て、異国の地に旅立つ決心をする歌である。この詩はタールトンに宛てたものと思われてきたが、ダニエル・ロビンソンは、デッサクルスカとして恋に飽きてはまた恋に生きる伊達者としてのペルソナを作り上げたロバート・メリーを意識した詩だと論じる。彼は「ロビンソンの即興は、デッサクルスカとアナ・マチルダの作風に丹念に似せたパステーション」と断定する(50)。ロバート・メリーは自らの恋の語り口を真似たその韻律を聞き逃すわけではなく、「ローラへ」と題した詩を返す。メリーは、アナ・マチルダとの恋歌で知られたデッサクルスカではなく、レオナルドという別名を名乗り、ローラに自らを友として受け入れるよう請う。ロビンソンの狙いは的中し、彼女はデッサクルスカ派の一翼に加わり、詩人としての着実な一歩をしるすのである。

レオナルドの友としての申し出に対してローラ・マリアは、「友情という名の優しき息遣いで私の心のともし火をかき立てようとなさるのですか」と応え、最後には「あなたの高鳴る旨は燃え続け、その力はすたることなく、命の限り燃え続けるでしょう」とメリーの恋愛詩の力を讃えて締めくくる(「レオナルドへ」)。デッサクルスカとアナ・マチルダとの恋歌はジョン・ベルが出版し、再版を重ねた『ブリティッシュ・アルバム』の売り物であり、大変なブームを引き起こしたが、ローラ・マリアとの詩の交換も、それに匹敵する数の詩が残っている。デッサクルスカの反戦歌「フォントノワの戦場に於ての挽歌」

に対して、アナ・マチルダは「退屈な挽歌調の歌はいや／太陽のような楽しい調子を選んで！」と、恋歌以外に関心を示さなかった。しかしロビンソンは、メリーの詩的技法、反戦や自由、平等、正義といったすべてにたいしてより深い共感を持っていた。『世界はこう進む』の冒頭部分でメリーの想像力が、「人を寄せ付けぬ平野を見渡し、倒れた勇者たちに優しく褒美をたむける」と、「フォントノワの戦場に手の挽歌」を讃えている。メリーは、ロビンソンの実質的なデビュー作品「わかってくれる君に宛てて」を読んですぐ、詩人としての魅力と親近感を覚えたのは間違いない。「リナルドからローラ・マリアへ」と題した詩で、ローラによって引き起こされた悪魔的な強い心の乱れをバイロン風の詩句でメリーはこう歌う。

我に絶望をあたえよ、もつとも強きミューズよ！  
 あなたの魔法をこの広き風景いっぱいに広げ、  
 狂った恐ろしき調子で  
 海原より魔物を呼び起こす。  
 嵐が怒りにまかせ重なりあい、  
 大海に唸りをあげさせ、自然を泣かせる。  
 創造者がそれを見て顔を赤らめるほどに  
 自分の作った世界がいかにも恐ろしいものになったかを見て。  
 私の方はこの流神の行為に酔いしれ  
 地獄の喜びを自分の主題とするのだ。<sup>6</sup>

一方、メアリー・ロビンソンによる「デッラクルスカへのオード」にも、ロバート・メリーの詩才についての的確な評価が見て取れる。

聖なる琴の光輝く守護者よ！  
 その絶えず変化する、常に魅了する歌は  
 心にこだまする  
 そのぞくぞくする魔法の指使い  
 ひとつひとつの神経が神聖なるときめきにより  
 狂気の渦のなかでその素晴らしき力を知る。  
 あなたの甘味な調べは

---

<sup>6</sup> *Poems by Mrs. M. Robinson*, J. Bell, 1791, p. 101. Web. *Google Books*. 日本語は拙訳。



歌の迷路のうずをめぐる

奔放な想像物が作りだす迷路のなかを。<sup>7</sup>

スチュワート・カランは、メアリー・ロビンソンの詩の特徴を、「呪われた海岸」や「アヴェイロンの野人」を例にとりながら「異次元の空間」を作り出す力にあると論じた。<sup>8</sup> ロビンソンの詩の魅力はロマン派の詩人たちのように一つの主題にそって深く、あるいは高く重層に構築することではなく、淡々と紡ぎだす歌が現実とは半ば重なり半ば異質な世界を作り出すのだと論じた。それにしたがって、ロビンソンにとってのロバート・メリーの詩は、その歌の「迷路」に迷いその「甘味さ」に酔いしれることがその魔法であり、魅力なのである。

ロバート・メリーとハナ・カウリーとの対面については、1789 年春ということがわかっており、メリーは「面会」(The Interview) という詩に残している。メリーとロビンソンとが実際に出会ったのが何年なのかについての記録はない。1790 年 11 月の『自由の桂冠』はロビンソンに献呈されている。またロバート・メリーが 1791 年、女優のエリザベス・ブラントンと結婚した際、ロビンソンはジュリアというペンネームで『オラクル』紙にメリーの結婚を祝福する詩を寄せていることから、この時期に両者は面識を得ていたのは間違いないであろう。哲学者ウィリアム・ゴドウィンは、1790 年代、反政府派の進歩的知識人や文人たちと広く人脈を築いていたことで知られるが、ロバート・メリーとは 1793 年に知り合い、そして 1796 年にはメリーの紹介でメアリー・ロビンソンとの面識を得たと日記に記録している。<sup>9</sup> ゴドウィンは、まもなくメアリー・ウォルストンクラフトと結婚するが、ロビンソンとの友情は終生続き 1800 年、ロビンソンの葬儀においては、ゴドウィンは数少ない参列者の一人だった。1796 年までに、メリーとロビンソンとは友人に紹介できるほどに親しい間柄だったということになる。

### 3. 『自由の桂冠』

メリーは、1789 年のフランス革命時、直接パリに向かうのではなく、フランス、グルノーブルの近く、グラン・シャルトルーズ修道院を訪ねていた。山間地にたたずむ古い

<sup>7</sup> Mary Robinson, *The Works of Mary Robinson*, Part I, Vol 1 (Routledge, 2009), p. 102. ロビンソンの詩の引用は、別に断りのない場合、この版からのもの。日本語は拙訳である。

<sup>8</sup> Stuart Curran, "Mary Robinson and the New Lyric," *Women's Writing* 9 (2002), p. 20.

<sup>9</sup> C. Kegan Paul. *William Godwin: his friends and contemporaries* (London: Henry S. King and Co, 1876), p. 78, p. 154.

修道院を見つめながら歴史と人間の生き方について瞑想する詩を書いている。ワーズワースの「ティンターン修道院」のように以前この地を訪ねた時の記憶と現在とを重ね、厳しい山地の景観を見つめながら人生の意味を問う。フランス革命について、メリーは当初慎重な態度を見せていたようである。しかし僧院にこもる修道士たちについて思いをめぐらしたのち、「万民の善のためでなくば／智慧や栄光を求めるは空しい」(And, O! unless the gen'ral good we aid,/ Vainly is wisdom sought, or glory won)という結論に至る。そして革命の進行を前に傍観者にとどまることを良しとせず、「グラン・シャルトルーズ」の結尾を飾るこの言葉とともに、パリへと向かう。<sup>10</sup>

さらば。私は世界に出てゆき、  
 そこで何でも見るべきものと出会う覚悟だ。  
 歓喜に飛び込むか悲しみに沈むか、  
 しかし常に人間として精神の自由を証言するのだ。

Then fare ye well — to join the world I go,  
 Prepar'd to meet whate'er I ought to find,  
 Start into bliss, or sicken into woe,  
 But still, as Man, assert the Freedom of the mind. <sup>11</sup>

パリでは国民議会の傍聴し、革命についてますます深く傾倒するようになる。メリーはフランスには 1789 年の暮れまでとどまる。フランス滞在中、革命の進行する中での自身の直接の経験をもとに書かれたのが『自由の桂冠』であり、「自由国民の誠実で熱心な代表であるフランス国民議会に、称賛と尊敬をもって捧げる」という献辞が表紙の次のページに添えられている。

ハーグリーブズ＝モーズリーは、メリーは 1789 年末までのフランスでの滞在中、革命への情熱が高まる中で『自由の桂冠』を書き上げたとするが、ジョン・ベルによって

<sup>10</sup> Hargraves-Mawdsley, W. N, *The English Della Crusicans and Their Time 1783-1828* (The Hague: Martinus Nijhoff, 1967) pp. 203-205.

<sup>11</sup> この詩を掲載した *The European Magazine*, Vol. 18 (1790), p. 388. 1790 年 11 月号には、R. Merry, July 29, 1789 と記されている。これは詩を書いた日付で、オンラインデータベース、*English Poetry 1579-1830: Spenser and the Tradition* は、*Diary, or Woodfall's Register* (29 June 1790) からの採録としている。

この本が出版されるのは翌 1790 年 11 月である。<sup>12</sup> エドマンド・バークの『フランスの革命についての省察』が出版されたのはほぼ同時であり、さらに『自由の桂冠』を贈呈されたメアリー・ロビンソンはすぐさま『世界はこう進む』を書き上げ、同月に出版する。ストラーンおよびダニエル・ロビンソンはメリーの詩はバークの『省察』に対する最も早い反論だと指摘する。<sup>13</sup> メリーがバークの『省察』の出版後にそれを読んで書くのは時期的に無理であるが、バークの革命についての持論はおそらく知られており、それに対する反論を含めて、フランスの滞在時よりの構想を出版の直前まで 1 年以上の期間を費やして書かれたものと推測できる。詩の後半でメリーは「寛大なるバークよ！」と呼びかける。革命の熱にうかされた野蛮な群衆が高貴なる伝統を残酷に踏みしめるというバークの言説に対してこう反論する。「まだ暴君から受けた打ち傷のいたみが癒えぬなかで、／膝まずかせ、家畜のくびきにつないだ部族を許せようか。／いつも雀の涙ほどの持ち物が、／容赦ない領主の命でその手から取り上げられたことを／忘れることができようか／贅沢が支配する下でほとんど飢え死にを強いられたことを」(561-569)。そして今、変化の荒波はたけり狂うが、やがて「真実と勤勉さのもたらす富が／社会という体に心の健康をもたらすだろう」(602-604) と予言するなかで、メリーはそこにつけた脚注で自身の見解をこう記す。

現在フランスがその下であえいでいる困難や苦しみは、革命によるものであるという主張がなされている。しかしそれとは全く逆に、これらは過去の破壊的で維持不可能な暴君政治の影響による負の遺産なのである。(p. 33)

同じ議論は、後にパーシー・シェリーがやはりフランス革命を隠れた主題とする『イスラムの反乱』(1817) の序において論じている。

社会状況にともなう苦難にあえいでいた者たちが理性の要請を聞き入れることができたろうか。一人が贅の限りを尽くす中で他のものはパンがなく飢えるような状況で。昨日まで足で踏みにじられていた奴隷が急に寛大で、許し深く、独立心を持つ人になれるだろうか。こうした変化は一貫した努力、堅忍不拔の希望、長年の苦難と不屈の勇氣、そして知性と徳を備えた何世代にもわたる人々の一貫した努力によりつくられる社会慣習の結果してもたらされるものな

<sup>12</sup> Hardgreaves-Mawdsley, p. 205.

<sup>13</sup> Strachan, John, ed. *British Satire 1785-1840*, Vol. 4: Gifford and the Della Crusicans (London: Pickering and Chatto, 2003), p. 308 および Daniel Robinson, pp. 85-86 参照。

のである。<sup>14</sup>

パークの議論における革命の精神を、尊い伝統や人間性を破壊する暴力性と結びつける論法に対して、メリーやシェリーは、専制政治こそが暴力の温床であり、革命が人間性の回復につながるという立場をとっているのである。

『自由の桂冠』についての一貫した批評はまだなされていない。ポウプらによって盛んに用いられた十八世紀の主要な形式である十詩脚対韻句による700行を超える長詩である。<sup>15</sup> ただし、英雄詩に特徴的な行末ないし連句ごとの区切りを弱くして、韻律に変化をつけて、より自然な語り口により表現する詩体となっている。牧歌的伝統に従い、“Genius or Muse”と呼びかけ、詩神の靈感を求める言葉で始まる随想の詩である。最初の220行ほどは、詩神への祈りと、自身のたどった道のり、世界の現状を振り返る随想からなり、それは世の弱者が不当に虐げられ、希望の見えない状況への絶望的な思いに至る。沈痛な思いに心を痛めているとき、突然声が聞こえてくる。自由の女神(Liberty)である。

深く瞑想的な気分に沈んでいると、  
英国が海流にその胸をゆだねるところ  
夏の色が美しい景色をきらめかせ  
海は絹をまとったようにつややかな緑色に眠るとき、  
寂しい泉から水が降るところ、  
私が権力の恐ろしい独占を悲しんでいると、  
天使のような声を私の聞き耳がとらえた  
そして半ば抑えつつも、抑えられない涙があふれた。

As late reclin'd in deep reflective mood,  
Where Britain leans her bosom to the flood,  
While Summer's tints begemm'd the beauteous scene,  
And silky Ocean slept in glossiest green;

<sup>14</sup> Percy Bysshe Shelley, *The Complete Poetry of Percy Bysshe Shelley*, Vol. 3, ed. Neil Fraistat and Nora Crook (Johns Hopkins UP, 2012), p. 115. 日本語は拙訳。

<sup>15</sup> Strachan, John, ed. *British Satire 1785-1840*. Vol. 4., pp. 308-328 に採録されている。この版では、メリーによる「序」および脚注が省略されているため、これらについては、大英図書館発行、Robert Merry, *The Laurel of Liberty, A Poem* (John Bell, 1790) のファクシミリ版による。メリーの詩の日本語訳は拙訳。

As by a lonely fountain's falling show'r,  
 I mourn'd the dire monopolies of pow'r,  
 A voice seraphic seiz'd my list'ning ear,  
 And half repress'd, and half impell'd the tear. (225-232)

自然の中に囲まれた中で、突然ある思いが立ち現れるのは、ウィリアム・ワーズワースの詩における重要な要素である啓示的瞬間(spots of time)であるが、メリーにおいても、詩人のまえに突然とそうした啓示的な瞬間が訪れた。たとえば、幸福感と同時に胸の奥には、人々が置かれた悲しい現状についての強い憤りが共存する点において、メリーのこの箇所は、ウィリアム・ワーズワースの「早春の賦」(Lines Written in Early Spring)を思い起こさせる。

わたしは幾千もの音が重なるのを聞いていた。  
 木立の中、背をよりかけ座っていいて  
 その甘味な気分の中、心地よい考えが  
 悲しい思いを心に呼び起こすとき。

I heard a thousand blended notes,  
 While in a grove I sate reclined,  
 In that sweet mood when pleasant thoughts  
 Bring sad thoughts to the mind. (1-4)

ワーズワースの詩は次の有名な詩行で終わる「嘆かずにいられようか／ひとは自らをなんと悲しきものにしてしまったのか」(Have I not reason to lament/What man has made of man?)。ワーズワースが歌うのは新緑や早春の花々、小鳥のさえずりであるが、暗に示唆しているのは、自然の中での生き物同士が互いにつながり共鳴し合うシステムとは対照的な、人間社会の暴力、抗争、戦争、束縛、互いを傷つけ、自ら不幸になる現状である。ワーズワースとメリーに共通するのは自然界における調和に対しての人間社会の不条理である。ワーズワースの問いには答えはない。しかしメリーにとっては革命が希望となった。逆に言えば、革命という選択肢がなくなったからこそ、ワーズワースの内省的な崇高さが生まれたともいえるのである。

『自由の桂冠』において、詩人の前に現れた自由の女神の類は光輝き、その眼には炎を宿す。「盾は持たず、名誉のみ、真実こそが／彼女の剣、彼女のほほえみを天使たちがあがめていた」(242-244)。しかしメリーの「自由」は、すべての抑圧を蹴散

らす全能の神では決してない。彼女は苦難の末、マグナカルタを勝ち取ったが、その歩みは「我がすべての闘争と不名誉」の一步に過ぎない。名誉革命でジェイムズ二世を退けたことよりも以下に見るような精神の帝国を示したことを誇る。

そして私はこの国に帝国を定め、  
 すべての人に寛大であたたかな心が燃え、  
 すべて価値ある者に感嘆し、すべて悲しむ者に心を寄せる。  
 勇気ある者には正義を、権力のある者には優しさを求め、  
 そうした人間性と精神とをつくった。  
 公正な意見がひろく人々の心を律し、  
 ひとりひとりが他の者たちのために生きようと。

That then I fix'd my empire on this coast;  
 Bade ev'ry heart with gen'rous ardour glow,  
 Throb at all worth, and feel for ev'ry woe,  
 Bade Valour to be just, Pow'r to be kind,  
 And form'd a character, and made a mind:  
 Bade fair opinion rule the gen'ral breast,  
 And ev'ry man to live but for the rest. (278-284)

メリーの「自由」は、決して力で抑圧者を倒すことで得られるものではない。絶えず自分を律し、人間性を高め、教育を進め、社会を改革してゆく決意なのである。こうした真の革命についての考え方は先に比較したシェリーのフランス革命論と一致している。それはウィリアム・ゴドウィンが主張した“Perfectibility”―すなわちより良き人格、社会に向けて前進を続けることに基礎を置いた人間と社会の変革―の思想である。

16

私の世の向上のための慈悲は、  
 地上の太陽となり世界を照らし、  
 教育と立法とが手をたずさえて、  
 人の魂に力をあたえ、磨きを加える、

---

<sup>16</sup> William Godwin, *Enquiry Concerning Political Justice* (1793), Book 6, Chap 1 を参照。

一人一人が自らの意思を持ち、  
個人の徳によって社会の悪を断つように。

So shall my meliorating mercy run  
To light the world, a sublunary Sun;  
Till Education, Legislation join  
To energize the soul, and to refine,  
To give each man possession of his will,  
And quell by private virtue, public ill. (313-318)

メリーの詩には、社会の不平等、権力の横暴さに対する怒りと、民衆を平等と正義に向けて行動するよう鼓舞するような言葉は多い。

彼ら〔民衆〕が意思を示せば、力は彼らのもの。  
団結が始まれば権利は戻る。  
九十九人は必ず一人に勝る。

That when they have the will, the strength's their own.  
That Right returns where Union is begun--  
That Ninety-nine can ever conquer One! (466-468)

しかしこの詩は、自由と革命の精神を高らかに謳歌するものとは言えない。真の革命に至る道のりは長く、戦争や揺り戻しの危険もある。また何よりもこれまで人々が圧政に苦しみ、多くの犠牲を払ったことについての苦悩がつきまとう。ここで革命についての詩人の結論は、先の自由の女神の言葉にあるように、現実世界について悲観するでも楽観するでもなく、持続的に人々の考え方や行動を改革し続ける意思こそが希望だという極めて現実的な思想である。短絡的に革命がすべてを解決するというような乱暴な考え方とは無縁のものだという点に注意しる必要がある。詩の最後では、「感傷的な幻想は止めよ」という言葉とともにメリーの思想をまとめている。

やさしき希望よ！おまえの感傷的な幻想は止めて  
平和の誠実な前触れとなるのだ。  
おまえの翼の心地よい風で私の熱のこもる胸を冷まして、  
この悩める知性を鎮め、休ませてくれ。

遠からず戦争の恥すべき怒りは終わると言ってくれ、  
 国王たちはふつうの人となり、みんなが友達となると。  
 心の優しさというそよ風が、人間という  
 船を人生の移ろいやすい潮の中を導き、  
 魂の混濁した情熱を抑え、  
 各部分が全体を完成に至らせ、  
 ひとつの喜びを全体の鼓動に与え、  
 地球が仮の天国となるように。

Come balmy Hope! thy fond delusions cease,  
 But be the faithful harbinger of peace!  
 Fan with thy soothing wing my fev'rish breast,  
 And calm this troubled intellect to rest;  
 Say, that ere long War's shameful rage shall end,  
 Monarchs be men, and ev'ry man a friend,  
 Say, that Benignity's soft gale shall guide  
 The human vessel o'er life's transient tide;  
 Subdue each turbid passion of the soul,  
 Till parts convey perfection to the whole;  
 Till to the gen'ral pulse one joy be giv'n,  
 And Earth become a temporary Heav'n. (691-702)

メリーの理想においては常に戦争の不安、心の激情による混乱と分裂の恐れが深く渦巻いており、希望は危ういもの、一時のものとの印象を与える。そこには人間の精神や営みは絶えず変化するものという理解がある。こうした理解とワーズワースの「ひとは自らをなんと悲しきものにしてしまったのか」という問いは決して遠いものではない。

#### 4. 『世界はこう進む』

不安、憤り、理想と現実性を織り交ぜたメリーの誠実な姿勢が『自由の桂冠』という作品に結実し、これはロビンソンが十代のころ出版した詩集以来 15 年の時を経て以来 15 年ぶりに単行本を出版するきっかけとなった。ロビンソンの娘エリザベスが母の死後出版した回顧録では、土曜日にメリーから届いた本を見て、火曜日には 345 行からなる彼女自身の『世界はこう進む』を脱稿したという。ロビンソンもメリーと同じく十



詩脚対韻句の形式をとっているが、詩人として形式上の批判を招かないよう、細心の配慮をしている。「英雄詩」の伝統を踏まえ、句またがり避け、対句でしっかりとまとめるなど、重厚な韻文を書いている。最初の 190 行ほどはロバート・メリーに対する賛辞、続いて、同時代の画家のジョシュア・レイノルズがティツィアーノの伝統を踏まえていることに触れながら、シェイクスピア、ミルトンの詩の伝統について、これを理想として讃えている。それと対比して、現代の詩は表面的であると批判する。ミルトンについての尊敬はバーボールドら、十八世紀の主要な女性詩人に共通して、ワーズワース、キーツ、シェリーらに受け継がれている伝統であるが、ロビンソンの主張は、自由と詩人としての誠実さを旨とするメリーや彼女自身はミルトンの伝統を受け継ぐ、イギリスの正当な詩人の伝統を継承するものだというものである。

192 行以降では、フランスにおいて、自由 (Freedom) がいかに人間に本来約束されていた「権利」である幸福と人間性を束縛より解き放ったかということを語る。自らの詩人としての正当性を訴えるこの詩においては、自由が芸術と創造性の源泉としての意味を持つからである。ここで特に注目したいのがプロメテウス神話のモチーフである。プロメテウス神話はシェリーの『縛めを解かれたプロメテウス』(1818)、あるいはバイロンの「プロメテウス」(1816) ないし、メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン、または現代のプロメテウス』(1818) が知られるが、人類が本来約束されていた火に象徴される知性を与えたプロメテウスは、ロマン派の作家たちの想像力を刺激したが、ロビンソンはフランス革命がまさに進行する時点において、革命の精神である自由をプロメテウスに重ねたことは注目に値する。直接にプロメテウスが言及されるのは自由の女神の描写で「あなたのこめかみにはプロメテウスの火が輝く」(339) と形容する一か所に過ぎないが、詩の後半においてこのモチーフには、しっかりとした展開がみられる。プロメテウスの神話においては、プロメテウスが粘土から人間を想像したところ、オリンポスの神々により火を奪われ、みじめな境遇に置かれていた。プロメテウスがオリンポスから火を盗むことで人間は救われたがプロメテウス自身はゼウスに罰せられ、断崖にはりつけにされてしまった。人間本来の権利について述べられるところがまず目を引く。

この自転する星が最初に始まったころ、  
天は人間に神聖な地位を保証した。  
彼に知的な心と  
他を動かす雄弁さと磨かれた真実とを授けた。

When this revolving Orb's first course began,

Heav'n stamp'd divine pre-eminence on Man;  
 To him it gave the intellectual mind,  
 Persuasive Eloquence and Truth refin'd; (290-293)

また、ゼウスがプロメテウスを縛った「鎖」そして人類が奪われた火についての言及もある。

人類に暴君の命令と抑圧者の鎖とを  
 軽蔑するように命ずる魔法はなにか。  
 何が高揚たる自由が人間の心に  
 陶醉の喜びを与えるようにさせるのか。  
 そして輝く炎に火花を散らせ  
 無知の精神を勇敢なる行為に火をつけるのか  
 何が自由にその最大の喜びを与えるか (282-288)

鎖でつながれたプロメテウスは、そのはらわたをワシに繰り返しえぐられ、またハルピュイアという羽根のある怪物を送って苦痛を与える。「王の稲妻」(regal light'nings) という言葉も、ゼウスがプロメテウスを罰することを連想させる。

罪を着せられ、個々の有徳な犠牲者は  
 魔物たちが恐ろしい災いを広げるところに導かれ、  
 過去の長い間、周到に見張られ  
 ガリアよ、お前の暴君は絶望という魔女を育てた。  
 暗黒のバスチーユでハルピュイアが  
 その牙で流す深紅の血で肥えるところ  
 卑怯な悪意が苦しむ者のため息をあざ笑うところ  
 その目から王の稲妻が放たれるところ。 (234-241)

プロメテウスのモチーフは自由と人間性の解放という主題から副次的に連想されたものと思われ、主要なモチーフを形成しているとは言えない。にもかかわらず、フランス革命という主題においてプロメテウスのモチーフを用いることは、ロビンソンが後のロマン派の重要な先駆けであることを示すものである。

ロビンソンは 1800 年に詩人としての生涯を閉じるまで、彼女の民主的な思想を先鋭化させてゆく。1798 年に書かれた「自由の誕生日」は、おそらくシェリーの「雲雀の

歌」(To a Skylark) に影響を与えた。二つの詩は詩形も全く異なり、自由と雲雀という別のものをうたっているが、シェリーの雲雀は悲しみも苦しみも知らず、自由に飛ぶ存在として、シェリーの考えるところでは自由のシンボルであったと考えられる。

自由に挨拶！天の申し子よ！  
高山の孤独な頂で、  
初めて生を受け、お前の父は、いにしえの時  
その母は、いつも娘盛り、無垢で陽気な  
その場所の守護神！お前の元気な姿は  
彼女が自然に与えたもの。自然の香り豊かな膝のうえ、  
朝のそよ風にそだてられ、輝く血筋は  
とくとくと流れる健康なせせらぎとなった。その輝く目は  
太陽の輝きをとってきたもの、その手足は  
慣習には縛られず、強くしっかり育った。

HAIL, LIBERTY! legitimate of Heav'n!  
Who, on a mountain's solitary brow  
First started into life; thy Sire, old TIME;  
Thy mother, blooming, innocent, and gay,  
The GENIUS of the scene! Thy lusty form  
She gave to nature; on whose fragrant lap,  
Nurs'd by the breath of morn, each glowing vein  
Soon throb'd with healthful streams. Thy sparkling eyes  
Snatch'd radiance from the Sun! while ev'ry limb,  
By custom unrestrain'd, grew firm and strong. (1-10)

シェリーの詩はこう始まる。

明るい妖精に挨拶！  
お前は鳥ではないだろう。  
天からあるいはその近く  
心の底からすべてを注ぐ  
豊かなメロディーをまったく意図せぬ技で

Hail to thee, blithe Spirit!  
 Bird thou never wert,  
 That from Heaven, or near it,  
 Pourest thy full heart  
 In profuse strains of unpremeditated art.

ロビンソンの自由が元気で陽気で無垢なところは、シェリーでは、「始まったばかりの喜びの魂だけが抜けだしたように」“Like an unbodied joy whose race is just begun” (15)。「その輝く目は太陽の輝きをとってきたもの」というところは、「沈む太陽の黄金の閃光」“In the golden lightning/ Of the sunken sun” (11-12)、また、「脈を打つ健康なせせらぎとなった」というところは、「お前の旋律はなぜそんな透明なせせらぎとなって流れるのか」“Or how could thy notes flow in such a crystal stream?” (85) といったところにエコーが聞き取れる。なによりも両者の詩の躍動するリズムが二つの詩を結びつけている。

## 結び

本稿においては、フランス革命の時代、ロバート・メリーとメアリー・ロビンソンという二人の詩人の間での詩の交換に焦点をあて、デッサクルスカ派として知られる新聞紙上で有名となったグループから発展したフランス革命にちなんだ詩をその後のイギリスロマン派との関係において検証してみた。二人の詩が発表された翌年の 1791 年、*The Anti-Jacobin* 編集長を経て、後に王党派の主要な評論誌 *The Quarterly Review* の主幹となるウィリアム・ギフォードは『バヴィアッド』という風刺詩を著し、デッサクルスカ派を徹底的にこき下ろした。マイケル・ゲイマーは、ジョン・ベルの出版によるデッサクルスカ派のアンソロジー、*The British Album* が版を重ね、その影響力を危惧したことがギフォードの動機だとするが、それ以上に、メリーに触発されてロビンソンも革命の自由の精神を賛美する見事な英雄詩を書いたことが要因に挙げられる。<sup>17</sup> ギフォードはロビンソンやカウリー（アナ・マチルダ）をメリーに付き従う愚かな女性として、雑言を吐きながら一蹴するという戦略をとる。やがて思潮が変わり、フランス革命に共感する声は、反革命の声に完全にかき消されるようになるなかで、ギフォードの意図も理解されなくなってしまう。ギフォードが『バヴィアッド』の続編『マヴィアッド』を書くこ

<sup>17</sup> Michael Gamer, *Romanticism, Self-Canonization, and the Business of Poetry* (Cambridge UP, 2017), pp. 110-111.

ろには、イギリスはすっかり保守化し、フランス革命を支持する論調は姿を消す。1795年刊の『マヴィアッド』の序文でギフォードはこう書く。「蝶々を車輪で粉碎するようなものという声を耳にする。しかしかつて(『バヴィアッド』が最初書かれたころ)この蝶々は驚であり、彼らの訳の分からない飛翔を、万人が讃嘆していたのだ」。<sup>18</sup> ここでギフォードは“butterflies”ないし“Eagles”というふうにデッラクルスカ派を複数で呼んでいるが、ロバート・メリーの次に有名だったのはアナ・マチルダ(ハナ・カウリー)とローラ・マリア(メアリー・ロビンソン)であるわけだから、「驚」とは、これら女性詩人を含んでいたことになる。『バヴィアッド』本文では彼女らを取るに足らない者たちとしながら、実は「驚」として恐れていたのである。ジャコバン主義とともに女性の声が高まることが、後に週刊誌 *The Anti-Jacobin* の編集長となるギフォードにとっての最大の恐怖であった。

ロマン主義文学は、フランス革命の理想が裏切られたことで、その理想のかなわぬ現実社会の上に革命的な幻視を重ね合わせることで生まれたという解釈がある。たとえば、ワーズワースは、野に咲く雛菊や白雉の少年、あるいは乞食など、些細なものや社会の最底辺の存在を描写することにおいて人間存在の最重要な問題にふれる詩を著し、これが現代詩の原点となった。しかし彼は同時代の読者からも、その哲学的主題と描写する題材との落差をしばしば揶揄され、ギフォードとは対立するホイッグ系の批評家フランシス・ジェフリーからも、革命的な意図を疑わせるその「理論」を執拗に批判された。ロマン派の詩における幻視の原点である理想社会実現の夢は、フランス革命という歴史的事件のみならず、その時代の、デッラクルスカ派と称されたロバート・メリーやメアリー・ロビンソンらが自由に男女間の恋愛詩を交換し、ヘレン・マリア・ウィリアムズがフランス革命の実像を伝え、トマス・ペインが革命の正当性を『人間の権利』で広く訴えた革命直後の文化状況に反映している。本稿はロバート・メリーとメアリー・ロビンソンとの間の文学的交流を概観することで、ロマン派の幻視(ヴィジョン)の原点を探ることを意図したものである。

---

<sup>18</sup> William Gifford, *The Baviad and Maviad* (J. Wright, 1797), p. 70.

注) 本研究は「メディアがつくる感受性の文学とイギリス十八世紀末女性詩人」の主題のもと、科研費(19K00449)の助成を受けたものである。